

大学フェンシング競技者のドーピング意識に関する研究

Study on doping awareness of university fencing player

1K09B172 弘瀬 智子

主査 松岡 宏高 先生

副査 友添 秀則 先生

【目的】

オリンピックは、世界最大のスポーツの祭典である、科学技術が発達していくにつれ、結果を求めるあまり「ドーピング」という違反行為に手を出してしまう選手が毎回現れ、ニュースや紙面を賑わせる。また、意図せずとも正式な知識がないまま、違反行為を犯してしまい、選手生命に傷を作ってしまう選手も出てしまう。

このような問題を解決するためには一体どうすれば良いのであろうか。本研究ではロンドンオリンピックフェンシング競技男子フルーレ団地で銀メダルを獲得し、国内ではマイナー競技ながらもスポットの当たったフェンシング競技に焦点を当てる。そして、性別および競技レベルごとにに対するドーピング意識を明らかにすることを目的とする。

【方法】

2012年10月11日から18日まで東京都駒沢屋内球技場において行われた関東学生フェンシング競技大会に出場した大学のうち、春のリーグ戦に出場した1～3部の大学から20校を対象とし、質問紙調査を実施し、質問紙は回答後に各大学ごとに回収し、159部を回収することができた。本研究では、まず大学生フェンシング競技者が、日本フェンシング協会が行うドーピング講習会の存在を認識しているのかを質問し、(1) 今までのドーピング講習会の受講経験の有無、(2) ドーピング講習会受講の意思、(3) 現在のドーピングについての考え方、そして(4) ドーピング講習会を受講する場合に興味のある内容について、性別および競技レベルによる比較分析を行った。

また、日本フェンシング協会において「これまでの協会のドーピング教育の取り組みについて」、「これからの課題について」、「今後の日本フェンシング会において求められる選手」について、質問紙を用いて回答を得た。

【結果】

回答者の性別および競技レベルによる、ドーピングに対する意識がどのように構成されているのかを比較分析した結果は、次のようにまとめられた。

① 性別：18項目中、4項目において男子よりも女子の方が精神的意識が高く、10項目において男子の方が「社

会的名声や地位のためならドーピングを行なっても構わない」という回答を得た。

② 競技レベル：世界大会出場レベルの選手と、国内大会レベルの選手で各項目の比較をすると、世界大会レベルの選手の方がアンチ・ドーピング意識が高く、国内大会出場レベルの選手の方が「勝つための手段」としてドーピング行為は仕方ないことだという意識があることが分かった。大学生にとっては、ドーピングの知識を入手する機会がほとんどなく、直接関わる機会もないため、意識をする場面が少ないため、このような結果になったと考えられる。

表1：男女別のドーピングへの意識

	男 (n=90)	女 (n=66)	T値
モラルに反する	6.07	6.39	1.40
勝つためには必要	1.74	1.39	2.52*
害がないならいい	2.20	1.62	2.32*
知識が必要	5.76	6.18	
フェアプレー精神に反する	6.16	6.12	0.23
優勝できるならする	2.26	1.71	1.75
有名選手の行動は社会に影響を与える	5.83	5.65	0.77
友達がしても関係ない	2.90	2.27	2.75**
社会的名声が得られるならする	2.58	1.50	3.95**
お金が手に入るならする	4.17	2.02	6.22**
してはいけない、許されない	5.49	6.16	2.37*
チームメイトがしていたら止める	5.57	5.99	1.51
コーチから渡されたら飲む	4.96	4.23	1.95
優れた選手がするのは仕方ない	2.00	1.99	0.57
コーチの指示ならする	2.21	1.71	2.3*
競技力向上のためにはいい	2.10	1.41	3.47**
検査がなければいい	2.67	1.82	2.95**
スポーツ発展には必要	2.12	1.74	1.71

【考察】

本調査の結果から、男女や競技レベルにおいて、ドーピングに対する意識に違いがあり、ドーピングに対する精神的な考え方の違いが明らかになった。しかし、現段階では直接関わる機会がなかったため、「今後の日本フェンシング協会の積極的なドーピング教育の実施を実現することで大学生のドーピング講習参加率が増え、アンチ・ドーピング意識の高い選手が育っていくのでは」と、考えられた。多くの学生には、ドーピング講習会受講への意欲はあるため、今後の講習会開催が日本フェンシング界内また、世界的にも誇れるアンチ・ドーピング意識向上と競技力強化につながると思われる。

世界大会という大きな場での更なる活躍や、日本国内でのスポーツというクリーンなイメージが定着している中、スポーツのクリーンなイメージの代表とも言える競技になり得るのではないだろうか。